

男女平等意識と自己開示・自己呈示の関連

Influence to Self-Disclosure and Self-Presentation of Sexual Discrimination

佐野 幸子
Sachiko Sano

1. 問題

対人コミュニケーションにおいて、相手に伝達する情報および伝達の戦略は様々に分類できるが、その中で、自己の表明方法として、自己開示と自己呈示を挙げることができる。自己開示とは、自己に関する情報を、率直に意図を持たず言語によって相手に伝達することと定義される (Jourard, S.M. 1958, 栗林 1995他)。一方、自己呈示は、「現実のあるいは想像された社会的相互作用に反映されるイメージを統制しようとする意識的・無意識的な試み」(Schlenker, B.R. 1980) と定義される。自己開示と自己呈示の差異については、区別することはできないという議論もあるが、先行研究を概括すると、自己開示は、言語的伝達に限定するのに対し、自己呈示は非言語的な伝達をも含むこと、自己呈示は意図的伝達であるのに対し、自己開示は意図的か否かは問わない、もしくは、意図的でないとされることが多い。本研究では、自己開示を意図的でない伝達、一方、自己呈示を他者の自己イメージを意図的に操作することを目的とした伝達と定義する。

自己開示は、その情報のレベルによって分類できる。誰にでも話せる情報は表面的レベルであり、特定の相手にしか話すことのできないものは内面的なレベルである。また、自己開示には、あるレベルの開示をした場合、同レベルの開示がなされるという返報性が存在する。この自己開示の返報性が対人関係における親密度を大きく規定すること、また、親密度によって、返報性の量が変化することが、社会心理学を中心とした領域で明らかにされている。また、自己開示の性差についても、研究が重ねられており、概括すると女性の

ほうが男性より、自己開示量が多く、レベルも深いものとなることが明らかとなっている。さらには、自己開示は一般に弱者から強者に、例えば、年少者から年長者、女性から男性になされる傾向があることも明らかとなっている。

ところで、青年期における対人関係のひとつに恋愛を挙げることができる。Rubin (1970) は、「恋愛は、相手に対する身体的・情緒的要求と相手の幸福や要求に対する積極的援助と関与、互いの親密なコミュニケーションから形成される」と定義している。Davis (1985) は、恋愛は友情を構成する諸要素 (尊敬、受容、理解など) に情熱 (魅惑、性的衝動、排他性) と世話 (擁護、最大の援助) が加わったものであると捉えているが、同時に恋愛はアンビバレントな感情を伴うと述べている。

多川ら (2006) は、日常的な報告やコミュニケーションは自己開示の1つであると考え、それが恋愛関係に及ぼす影響について研究を行った。その結果、異性友人よりも恋人において最もよく日常的コミュニケーションが行われていることを示した。谷口・大坊 (2005) は、異性との関係親密度が、その異性に対する自己呈示動機に与える影響について検討した結果、恋愛感情は自己呈示動機と正相関を示し、異性友人関係よりも恋人関係において自己呈示動機が高くなることを明らかにした。

恋愛の性差についても、多くの研究がなされている。例えば、竹村 (1987) はつきあうつもり期間の長短による相手の選択基準、深澤ら (1991) は嫉妬を感じた時の対応、松井 (1990) は恋愛感情の高揚スピード、大坊 (1988) は恋愛中により熱中している性別に差異があることを明らかにしている。これらの差異の生じ

る理由については、幾つかの説明がなされているが、いずれも社会文化的要因を考慮している。

現代社会は、表面的、制度的には男女平等へと進みつつあるが、依然として不平等な現実が存在しており、意識的または無意識的に差別が行われている。恋愛という異性との関係、それもアンビバレントな感情を伴い緊張をもたらす人間関係においては、男女の差異を必要以上に認識する可能性が高い。さらには、当事者の男女平等意識が大きな影響を与えることが予想される。男女平等意識が高い女性の場合、男性に対して、自己が「弱者」であるという認知は低く、自己開示量は低いものに留まるのではないだろうか。一般に内面的自己開示をすることは、「未熟」とであると低い評価を受ける可能性があることから考えても、男性に対処対等な立場を考える者は、安易に自己開示をしないほうが有利な戦略となる。一方、自己呈示においては、「弱者」であるという認知が高いと予測される男女平等意識の低い者のほうが、より意図的に自己の肯定的印象を形成しようとするのではないだろうか。一般に、男女平等意識が低い者は、就業継続意図も低く、結婚等の異性との親密な関係が自己の社会的地位を左右する可能性が高いという認識も強い。よって、異性との関係において、自己をより好印象に認知させることは有利な戦略となる。

同じ異性との関係であっても、友人と恋人では、人間関係における緊張度、性別を意識する程度も異なってくる。よって、男女平等意識が与える自己開示・自己呈示への影響は、異性の友人関係より、恋愛関係において顕著となるのではないだろうか。

なお、自己呈示については、JonesとPittman(1982)が、取り入り、自己宣伝、示範、威嚇、哀願に5分類し、否定的な自己呈示により影響力を行使しようとすることもありうることを示唆している。栗林(1995)によると、自己呈示は研究目的に応じて様々な次元に分類されており、自らの能力や遂行水準などが優れていることを表明するような自己高揚的呈示、逆に、自分の能力や遂行水準に対して否定的あるいは避難するような自己卑下的呈示、社会的承認や賞賛を得るために行う獲得的自己呈示や社会的損失を避けるための防衛的自己呈示などがあるとしている。本研究では、谷口ら(2005)の先行研究を踏まえ、肯定的

な自己呈示のみに限定する。

II. 方法

(1) 調査対象および調査実施方法

被験者は、文化系私立四年制女子大学に通う学生である。調査時期は、2007年7月である。授業時間の一部を使用し、集団法により実施した。質問紙を配布した対象は178名であり、全員から回収した。質問紙への回答に要した時間は、約20分であった。

(2) 質問紙の構成

第1に、被験者の属性を尋ねた。項目は、性別、年齢、学年、大学、学部である。

第2に、男女平等意識を尋ねた。佐野らの先行研究(1999)では、既存の尺度等を参考に、職場処遇、家庭役割・性別特性などについて計15項目(「女性にも、責任のある仕事や重要事項の決定を任せても大丈夫だ」、「男性も家事や子育てに積極的に参加すべきだ」等)を集めた尺度を使用している。さらに、佐野(2005)の研究では、新たに「主たる収入は男性が稼ぐべきだ」等、5項目を加えた20項目の尺度を使用している。本研究でも、この尺度を使用する。各項目について5段階(1点:まったくあてはまらない~5点:とてもあてはまる)で回答を求め、高得点ほど平等意識が高くなるよう得点化する。

第3に、最も親しい異性を想定させた上で、その人物との関係を尋ねた。想定させる方法は、「家族以外の身近な人(芸能人など実際に会うことのない人を除く)の中で、最も親しい異性を一人想定してください。その人物をXさんとします。」という教示を項目群の冒頭に配置し、後の質問項目では、「Xさんは、…」、「Xさんに…」等の言葉を使用するというものである。関係については、間柄(恋人・友人・その他)、知り合ってから期間((以下、「交際期間」と記す)、親しく付き合うようになってからの期間(以下、「親密期間」と記す))を尋ねた。さらには、谷口ら(2005)が作成した最も親しい異性との親密さ測定尺度(『重要性』因子7項目、『恋愛感情』因子3項目)や、中村(1991)が関係満足感を測定するのに用いた2項目などをもとに、関係の重要性を問う6項目の尺度を作

成した。項目例は、「私は、Xさんと親密である」、「Xさんとの関係に依存している」などである。さらには、同先行研究尺度を利用し、被験者および想定者（被験者による推定）双方の恋愛感情・友情の深度問うものを6項目作成した。これらは、7段階（1点：まったくそうでない～7点：非常にそうである）であり、高得点ほど親密もしくは重要であることを示す。

被験者の恋愛感情をより明確に把握するために、Love-Liking 尺度 (Rubin 1970) を藤原ら (1983) が日本語に翻訳した、日本版 Love-Liking 尺度 (Love 尺度13項目、Liking 尺度13項目) から、Love 尺度を抜粋し使用した。項目例は、「もしXさんが元気がなさそうだったら、私は真っ先に励ましてあげたい」、「すべての事柄について、私はXさんを信頼できるという気がする」他である。回答は、先と同様の7段階で求め、高得点ほど愛情深いことを示した。

第4に、自己開示（欲求・行動）の程度を尋ねた。自己開示尺度 (ISDQ) (飯長 1997) をもとに、出口・吉田 (2004) が作成した自己開示の内面性を測定する尺度は、話しにくさ『低位』因子9項目、『中位』因子8項目、『高位』因子全5項目、以上17項目から構成されている。本研究では、『中位』因子を省き、『低位』因子に属する「好きな音楽、嫌いな音楽について」、「好きな食べ物、嫌いな食べ物について」他、および『高位』因子に属する「性格の短所について」、「今までで一番恥ずかしいと思った経験について」他を、欲求、行動尺度ともに使用した。自己開示欲求については、「自分を打ち明けて話したいと願っていますか。」、自己開示行動については、「自分を打ち明けて、実際に話をしていますか。」という教示のもとに、7段階で回答を求め、高得点ほど欲求が強く、行動が頻繁であるよう得点化した。

第5に自己呈示（欲求・行動）の程度を尋ねた。開示については、欲求と行動次元双方に、同一項目を使用した。自己呈示欲求については、Leary et al. (1994) が考案した項目をもとに谷口ら (2005) が翻訳・作成した尺度を利用した。この尺度は、『外見的魅力』因子3項目（『外見的に魅力的である』、『ハンサムである（かわいい）』他）、『有能さ』因子4項目（『能力がある』、『知的である』他）、『社会的望ましさ』因子3項目（『道徳的である』、『倫理

観がある』）、『個人的親しみやすさ』因子2項目（『親しみやすい』、『好感のもてる』）から構成されている。本研究では、各因子より因子負荷量上位2項目を抜粋した。質問は、想定人物とふだん一緒にいる時どの程度示したいと思うかというものであり、7段階で回答を求め、高得点ほど欲求が高くなる。

自己呈示行動は、動機の4因子に対応するものを独自に作成した。『外見的魅力』因子は「Xさんと会うときは、いつもよりお洒落な服装をする」、「Xさんと会うときは、いつも以上に髪型に気を使う」他、『有能さ』因子は「自分が得意なことをアピールする」、「自分の長所を知ってもらえるような機会を探す」他、『社会的望ましさ』因子は「Xさんがやっていることを積極的に手伝う」、「Xさんとの約束は、無理しても守る」他、『個人的親しみやすさ』因子は「Xさんには、他の人より親切に接する」、「Xさんには、思いやりがあることをアピールする」他である。4因子とも4項目準備し、計16項目について、想定人物とふだん一緒にいる時どの程度行うかを7段階で問い、高得点ほど行動頻度が高くなるよう得点化した。

III. 結果

(1) 被験者について

回答者数は178であったが、研究テーマ自体が、恋愛という年齢や社会的地位に大きく影響を受けるであろう内容であるため、学年不明者1名および24歳以上である者4名を除外した。また、分析において重要変数となる「最も親しい異性との関係」を問う項目に回答しなかった者4名、「最も親しい異性との関係の重要性」項目に欠損値が多い者1名を分析対象から除いた。さらに、交際期間もしくは親密期間に未回答であった12名を除外した。よって、分析対象データは156 (86.64%) となる。

年齢分布をみると18歳が49.36%と半数を占め、平均は18.96歳 (SD=1.20) であった。学年は、1年生が69.87%と過半数を占め、平均は1.55年 (SD=0.91) であった。

(2) 男女平等意識について

男女平等意識尺度の全項目を因子分析（主因子法、

Tab. 1 男女平等尺度各項目の平均および因子分析の結果 (n=156)

項目 (*印は反転)	MEAN	(S.D.)	先行研究での因子	伝統的性別 役割観否定	伝統的性別 特性観否定	職業面での 平等支持
主たる収入は男性が稼ぐべきだ*	3.09	(1.22)	性別特性・役割否定	.70	.30	.08
男(女)の子らしく育てる*	3.28	(1.15)	性別特性・役割否定	.64	.26	.10
女性は家事・育児をきっちり*	2.46	(1.01)	残余	.55	.13	-.07
子育てや介護といった役割は女性*	3.24	(1.00)	性別特性・役割否定	.53	.23	-.05
暖かい家庭に重要なのは母親*	2.66	(1.18)	性別特性・役割否定	.50	.18	.14
娘に対して門限などを厳しく*	2.69	(1.14)	性別特性・役割否定	.47	-.01	.06
性別特性をいかした職業*	2.98	(1.08)	性別特性・役割否定	.47	-.10	.08
女性は冷静さ客観的判断力が劣る*	3.79	(0.94)	性別特性・役割否定	.26	.61	.09
男性は感受性や心遣いの面で劣る*	3.24	(1.05)	残余	.26	.57	-.09
教育の機会は平等	4.63	(0.58)	残余	-.01	.51	.27
女性も、責任のある仕事や重要事項の決定	4.32	(0.74)	社会的男女平等支持	.14	.48	.26
男性も、家事や子育てに参加	4.31	(0.73)	社会的男女平等支持	-.07	.43	.10
女性も働いた方がよい	3.39	(0.86)	残余	.28	.05	.58
完全に平等な仕事	4.13	(0.91)	社会的男女平等支持	.01	.22	.51
女性はもっと職場で活躍すべき	3.97	(0.80)	社会的男女平等支持	-.11	.23	.48
能力や適性に男女差なし	3.81	(0.99)	残余	.03	.03	.45
給与差は仕方のない*	4.26	(1.02)	性別特性・役割否定	.14	.38	.32
女性上司は難しい*	3.35	(1.08)	残余	.28	.32	.22
女性のほうから愛の告白はしない*	3.86	(1.04)	残余	.21	.27	.09
デートを割り勘にすべき	3.15	(1.00)	残余	-.09	.07	.06
固有値				4.46	2.14	1.46

VARIMAX 回転) にかけた結果を Tab. 1 に示した。佐野 (2005) の研究では、『社会的男女平等支持』、『性別特性・役割否定』の 2 因子構造となっていたが、本研究では、3 因子構造が妥当であるという結果になった。第 I 因子は、「家計の主たる収入は男性が稼ぐべきだ」、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる方が良」、「女性は仕事をもったとしても、家事・育児をきちんとすべきだ」など伝統的性別役割分業に関する 7 項目に高い負荷量を示していたため『伝統的性別役割観否定』と命名した。第 II 因子は、「女性は冷静さ、客観的な判断力の面で男性より劣る」、「男性は、感受性やこまやかな心遣いの面で女性より劣る」など、伝統的性別特性に関する 5 項目に高い負荷量を示したため、『伝統的性別特性観否定』と命名した。第 3 因子は、「経済的な必要がなくても女性も働いた方がよい」、「女性が男性と完全に平等な仕事内容、賃金、昇進を得られるようになることが望ましい」など 4 項目に高い負荷量を示し、これらはいずれも職業に関する項目であったため『職業面での平等支持』と命名した。これら 3 因子について、項目合計を項目数で割った値を

合成変数として使用した。信頼性を検討したが、『伝統的性別役割観否定』は Cronbach の α .77 と一定水準を保っているが、『伝統的性別特性観否定』、『職業面での平等支持』は .6 台と低かった。それぞれの平均値をみると『伝統的性別特性観否定』および『職業面での平等支持』は 4 点前後と高い得点を示したが、『伝統的性別役割観否定』は、2.91 (SD=0.72) に留まった。これら合成変数の平均等は、Tab. 2 に示した。

(3) 想定人物およびその関係について

想定人物の内訳をみると、「友人」と回答した者ももっとも多く 83 名 (53.21%)、ついで「恋人」は 49 名 (31.41%)、「その他」は 24 名 (15.38%) であった。

被験者全体での交際期間平均は 46.87 ヶ月 (SD=48.50)、親密期間平均は 32.68 ヶ月 (SD=43.14) と非常に長い。交際期間を、想定人物との間柄別にみると、恋人 29.06 ヶ月 (SD=29.26)、友人 53.59 ヶ月 (SD=48.08)、その他 59.96 ヶ月 (SD=69.31) となり、恋人の場合の期間が短い。Tab. 3 に示すように、親密期間についても同様の結果がでた。

関係重要性尺度（得点範囲 1～7）6 項目の Cronbach の α を算出したところ、「X さんとの関係に満足している」が著しく信頼性を減じることが明らか

Tab. 2 男女平等、自己開示、自己呈示等に関する合成変数の平均と信頼性（Cronbach の α ）係数（n=156）

	項目数	MEAN	(S.D.)	α
男女平等意識（得点範囲 1～5）				
『伝統的性別役割観否定』	7	2.91	(0.72)	.77
『伝統的性別特性観否定』	5	4.06	(0.54)	.67
『職業面での平等支持』	4	3.83	(0.60)	.60
関係重要性得点（得点範囲 1～7）	5	4.35	(1.41)	.83
Love 得点（得点範囲 1～7）	11	3.50	(1.49)	.94
自己開示（得点範囲 1～7）				
欲求				
『表面的（世間話）』	5	5.42	(1.10)	.92
『表面的（学校）』	3	4.55	(1.17)	.69
『内面的』	5	3.79	(1.22)	.83
『恋愛（単一項目）』	1	4.50	(1.58)	-
行動				
『表面的（世間話）』	5	5.07	(1.44)	.92
『表面的（学校）』	3	3.84	(1.59)	.84
『内面的』	5	3.28	(1.44)	.72
『恋愛（単一項目）』	1	3.97	(2.03)	-
自己呈示（得点範囲 1～7）				
欲求				
『有能さ』	2	4.77	(1.13)	.86
『社会的望ましさ』	2	4.77	(1.24)	.85
『個人的親しみやすさ』	2	5.77	(1.10)	.91
『外見の魅力』	2	4.72	(1.27)	.95
行動				
『有能さ』	4	3.38	(1.33)	.88
『社会的望ましさ』	4	3.99	(1.33)	.80
『個人的親しみやすさ』	4	3.98	(1.56)	.90
『外見の魅力』	2	4.30	(1.68)	.93

かになったため、残る 5 項目の平均値を使用し、関係重要性得点を作成することとした。Cronbach の α は、.83 であり高い信頼性を保証している。関係重要性得点の平均は、ほぼ中央「どちらでもない」に位置する 4.35 (SD=1.41) であった。関係満足単一項目の平均は、5.00 (SD=1.57) であった。

想定人物への恋愛感情、想定人物からの恋愛感情（推定）、想定人物に望む現在より以上の恋愛感情の得点はいずれも 3 点台に納まっている。一方、友情については、いずれも 1 点程度高く、4 点台となった。これらの結果は、Tab. 3 に示している。

Love 尺度（得点範囲 1～7）項目を使用して、LOVE 得点を作成するにあたり、Cronbach の α 係数を算出したところ、「すべての事柄について、私は X さんを信頼できるという気がする」、「X さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる」は、信頼性を減じることが明らかとなったため、これらを削除し 11 項目の平均値を合成変数とした。 α は .94 であり、非常に高い信頼性を示した。LOVE 得点の平均は、3.50 (SD=1.49) であり、やや低い値となった。

想定した異性との関係別に、交際期間、関係重要性、恋愛感情等の平均値を算出し、かつ分散分析を行った結果を Tab. 3 に示している。

恋人関係と友人関係を比較すると、交際および親密期間は恋人の方が有意に短い。例えば、親密期間は、恋人の場合、15.20ヶ月 (SD=12.84) と 1 年と少しであるのに対して、友人は 38.47 (SD=42.06) 3 年以上となっている。恋愛感情に関する項目および LOVE

Tab. 3 想定人物別にみた被験者と想定人物 (X) の関係に関する変数の平均および分散分析

	恋人 (n=49)		友人 (n=83)		その他 (n=24)		全体 (n=156)		F 値	TUKEY 法 (.05%)		
	MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)		恋人 友人	恋人 他	友人 他
交際期間 (ヶ月)	29.06	(29.26)	53.59	(48.08)	59.96	(69.31)	46.87	(48.50)	5.25 **	*	*	
親密期間 (ヶ月)	15.20	(12.84)	38.47	(42.06)	48.33	(69.75)	32.68	(43.14)	6.82 **	*	*	
関係重要性	5.72	(1.00)	3.75	(1.08)	3.63	(1.12)	4.35	(1.41)	59.46 **	*	*	
関係満足※	5.22	(1.72)	4.96	(1.50)	4.67	(1.46)	5.00	(1.57)	1.06			
X への恋愛感情 ※	6.53	(0.77)	2.63	(1.77)	2.46	(1.79)	3.83	(2.39)	111.21 **	*	*	
X からの恋愛感情 ※	6.41	(0.76)	2.60	(1.79)	2.16	(1.62)	3.73	(2.37)	112.21 **	*	*	
X からの恋愛感情希望※	5.02	(1.89)	2.58	(1.90)	2.88	(2.13)	3.39	(2.22)	25.59 **	*	*	
X への友情 ※	4.14	(1.79)	5.18	(1.18)	4.00	(2.00)	4.67	(1.62)	9.78 **	*		*
X からの友情 ※	3.66	(1.89)	4.72	(1.39)	3.58	(2.12)	4.21	(1.76)	8.15 **	*		*
X からの親しさ希望 ※	5.31	(1.67)	4.25	(1.89)	4.00	(1.91)	4.54	(1.89)	6.39 **	*	*	
LOVE 得点	4.84	(1.15)	2.86	(1.17)	3.02	(1.34)	3.50	(1.49)	44.96 **	*	*	

注) * p < .05 ** p < .01 ※印は単一項目

得点、相手からの親しさ希望得点は、恋人のほうが有意に高い。逆に、友情に関する得点は、友人のほうが有意に高い。これらの差異は、恋人への恋愛感情得点の場合、想定者が恋人である場合は、6.53 (SD=0.77) と非常に高いのに対し、友人である場合は2.63 (SD=1.77) と非常に低いという結果に代表されるように、恋愛感情に関する項目は、恋人のほうが高い。逆に、友情に関する得点は、相手への友情(友人5.18 (SD=1.18)、恋人4.14 (SD=1.79))に代表されるように、想定者が友人である場合のほうが高い。関係重要性は、恋人の場合、5.72 (SD=1.00) と非常に高いが、友人は、3.75 (SD=1.08) であり中間値付近となっている。

恋人関係と「その他」の関係を比較すると、先の友人関係との比較とほぼ同様の結果となるが、友情に関する項目得点に有意差は見られない。友人関係と「その他」の関係を比較すると、友情に関する2項目のみ、友人のほうが有意に高くなっており、「その他」を想定対象とした場合、相手への友情は、4.00 (SD=2.00) に留まっている。

(4) 自己開示・自己呈示について

自己開示欲求尺度および行動尺度14項目は、同一項目であり、実験デザイン上、表面的自己開示と内面的自己開示の2因子構成を設定している。よって、欲求および行動別に因子分析(主因子法、VARIMAX回転)を行い、因子構造の再現を確認した。この結果をTab.4に示している。欲求、行動とも、表面的自己開示因子が、2因子に分割された。項目をみると、第Ⅲ因子に高負荷量を示したものは、先行研究での『表面的』因子に含まれる様々な話題の中から学校に関するもののみが集まっていた。よって、第Ⅰ因子を『表面的(世間話)』、第Ⅲ因子を『表面的(学校)』と命名した。『内面的』因子は、ほぼ先行研究通りとなったが、「今までどんな異性を好きになったことがあるか」という項目のみ高い負荷量を示さず、残余項目となった。

因子ごとに負荷量の高かった全項目の平均値を算出し、合成変数を作成した。これらの平均値と信頼性(Cronbachの α)をTab.2に示した。欲求、行動とも『表面的(世間話)』が最も高く、次いで『表面的

Tab.4 自己開示2尺度(動機・行動)の因子分析(n=156)

項目	動機			行動		
	第Ⅰ因子 『表面的: 世間話』	第Ⅱ因子 『内面的』	第Ⅲ因子 『表面的: 学校』	第Ⅰ因子 『表面的: 世間話』	第Ⅱ因子 『内面的』	第Ⅲ因子 『表面的: 学校』
好きな歌手、俳優、スポーツ選手について	.85	.06	.17	.83	.21	.20
好きな音楽、嫌いな音楽について	.81	.13	.15	.80	.14	.10
好きな娯楽について	.79	.17	.19	.68	.20	.26
好きな食べ物、嫌いな食べ物について	.77	.25	.19	.80	.36	.11
好きなテレビ番組について	.74	.15	.24	.81	.17	.18
両親の教育に対する不満について	.07	.78	.09	.13	.69	.15
家庭の事情について	.15	.72	.08	.32	.80	.11
性格の短所について	.22	.65	.25	.34	.66	.21
両親の収入について	.07	.60	.04	.04	.54	.21
今までで一番恥ずかしいと思った経験について	.23	.60	.28	.34	.66	.21
属しているクラブ・サークルについて	.20	.00	.72	.11	.15	.73
やっている又はやっていたスポーツについて	.31	.22	.55	.29	.21	.55
大学の先生をどう思っているかについて	.14	.33	.51	.15	.36	.58
残余項目						
今までどんな異性を好きになったことがあるか	.30	.23	.25	.35	.43	.31
固有値	5.58	2.14	1.22	6.38	1.78	1.19

(学校)、『恋愛(単一項目)』が同レベルで中間の値を、『内面的』は最も低いという値となった。欲求と行動を比較すると、前者のほうが全体に高い。それぞれの合成変数について Cronbach の α 係数を算出したところ、自己開示：欲求の『表面的(学校)』が.69、自己呈示：行動『内面的』が.72とやや低かったが、それ以外は.83以上と高かった。

自己呈示に関する項目は、欲求と行動では項目が異なる。まず、欲求に関する8項目について因子分析(主因子法、VARIMAX 回転)を行ったが、固有値は、第1因子から順に、4.55、1.23、0.88、0.62、0.26と減じ2因子構造であることが判った。因子数が2となることは、項目数が8であることから当然であると思われる。しかし、この結果に基づいて分析を行うと、自己呈示：欲求は、ほぼ1次元で分析せざるを得なく、自己呈示：行動との関連をみるなどの研究デザイン上問題が生じる。よって、先行研究の4因子構造を採択し、この後の分析を行うこととした。因子ごとに項目合計/項目数を算出し、合成得点とした。Cronbach の α 係数は.85以上と高かった。各合成変数の平均値をみると、『個人的親しみやすさ』は突出して高く、5.77 (SD=1.10) であったが、残る『有能さ』、『社会的望ましさ』、『外見的魅力』は、4.47台に集中した。

自己呈示：行動尺度についても、欲求尺度と同様因子分析を行ったが、固有値は、第1因子より8.47、1.77、1.04、0.80、0.72と減じ、当初の研究デザインとは異なる因子構造であることが判った。しかし、想定した4因子構造として、信頼性(Cronbach の α) を検討したところ、『外見的魅力』のみは4項目中2項目が信頼性を低下させることが、それ以外の因子は信頼性を低める項目は含んでいないことが明らかとなった。よって、本研究では研究デザインを優先した項目群による合成変数(項目合計/項目数)を採用する。信頼性係数 α は、.80以上といずれも高い。平均値をみると、『有能さ』は3.38 (SD=1.33) とやや低く、『社会的望ましさ』と『個人的親しみやすさ』は4点弱となっている。『外見的魅力』は4.30 (SD=1.68) とやや高かった。これら自己呈示に関する合成変数の平均と信頼性は、Tab. 2 に示した。

(5) 男女平等意識等の尺度内・尺度間相関について

男女平等意識尺度内の相関をみると、『伝統的性別特性観否定』と『伝統的性別役割観否定』は.36 ($p < .01$)、『伝統的性別特性観否定』と『職業面での平等支持』は.28 ($p < .01$)、『伝統的性別役割観否定』と『職業面での平等支持』は.18 ($p < .05$) に留まった。

想定人物との関係に関する項目および尺度間では、友情に関するもの同士、恋愛感情に関するもの同士が.5以上の高い正相関を示すことが多かった。関係満足項目は、関係重要性和.26、想定人物からの友情と.24という1%水準の正相関を示したのみであった。

自己開示：欲求内の相関は.31以上、自己開示：行動内は.43以上の正相関 ($p < .01$) を示した。欲求と行動間の相関をみると、同因子間では1%水準.54以上という高い正相関を示した。

自己呈示：欲求内の相関は.42以上、自己呈示：行動内は.36以上の正相関 ($p < .01$) を示した。欲求と行動間の相関をみると、同因子間では1%水準.31から.56となる。

想定人物との関係に関する項目および尺度と、自己開示・自己呈示間の相関をみると、関係重要性、想定人物への恋愛感情、想定人物からの恋愛感情、想定人物からの恋愛感情希望、想定人物からの親しさ希望、LOVE 得点がほとんどの自己開示・自己呈示因子と正の相関を示した。一方、友情に関する項目、関係満足度、交際期間は、有意な相関をあまり示さなかった。

想定人物との関係に関する項目および尺度と、男女平等意識間の相関は、いずれも有意とはならなかった。

Tab. 5 に、男女平等意識と自己開示・自己呈示間の相関を示した。『伝統的性別役割観否定』は、低い値ではあるが、自己開示とは3組、自己呈示とは6組と、有意な負の相関を示すものが多かった。一方、『伝統的性別特性観否定』は、有意な相関を一切示さなかった。『職業面での平等支持』は、自己開示：行動『表面的(世間話)』と、5%水準の正相関を示したのみであった。

(6) 男女平等意識および関係が自己開示・自己呈示に与える影響について

自己開示や自己呈示は、対象となる人物との関係性

Tab. 5 男女平等意識と自己開示・自己呈示間の相関 (n=156)

	男女平等意識		
	『伝統的性別 役割観否定』	『伝統的性別 特性観否定』	『職業面での 平等支持』
自己開示：欲求			
『表面的（世間話）』	-10	.03	.07
『表面的（学校）』	-15	-.02	-.03
『内面的』	-18 *	-.13	-.04
『恋愛（単一項目）』	-26 **	-.12	.03
自己開示：行動			
『表面的（世間話）』	-12	.14	.16 *
『表面的（学校）』	-12	-.03	-.04
『内面的』	-11	-.08	.05
『恋愛（単一項目）』	-24 **	-.05	.10
自己呈示：欲求			
『有能さ』	-13	-.05	-.09
『社会的望ましさ』	-17 *	-.04	.01
『個人的親しみやすさ』	-24 **	-.02	.01
『外見の魅力』	-14	-.01	.05
自己呈示：行動			
『有能さ』	-19 *	-.03	.02
『社会的望ましさ』	-18 *	-.04	-.01
『個人的親しみやすさ』	-31 **	-.10	.02
『外見の魅力』	-20 *	-.04	.10

注) * p<.05 ** p<.01

によって大きく影響を受けることが予想される。よって、この後の分析では、想定した異性との関係を「その他」と回答した被験者24名を除外し、関係が明確に同定できる異性を想定した者（恋人49名、友人83名、計132名、84.62%（/有効回答数））のみを対象とする。

男女平等意識平均は、『伝統的性別役割観否定』2.90 (SD=0.74)、『伝統的性別特性観否定』4.05 (SD=0.53)、『職業面での平等支持』3.87 (SD=0.61)となる。各男女平等意識合成変数平均値を使用し、被験者を高群・低群に2分割した。

自己開示・自己呈示に男女平等意識および想定人物との関係がどのような影響を与えるのかを調べるため、男女平等意識（高群・低群）×関係種別（恋人・友人）の分散分析を行った。

Tab. 6に『伝統的性別役割観否定』×関係種別にみた自己開示：欲求・行動得点を示した。『伝統的性別役割観否定』高低群の主効果がみられた開示は、『欲求：内面的』F値5.06 (p<.05、高群平均3.74

Tab. 6 男女平等意識『伝統的性別役割観否定』×関係種別にみた自己開示：欲求・行動得点

		欲求				行動			
		『表面的 （世間話）』	『表面的 （学校）』	『内面的』	『恋愛 （単一項目）』	『表面的 （世間話）』	『表面的 （学校）』	『内面的』	『恋愛 （単一項目）』
平等意識低群									
恋人	MEAN	5.07	5.95	4.72	5.29	4.63	5.82	4.53	5.42
	(S.D.)	(1.21)	(0.90)	(0.97)	(1.57)	(1.87)	(1.10)	(1.33)	(1.67)
友人	MEAN	4.53	5.36	3.82	4.69	3.82	4.90	3.01	4.23
	(S.D.)	(1.14)	(1.01)	(1.12)	(1.56)	(1.48)	(1.56)	(1.26)	(1.94)
合計	MEAN	4.72	5.57	4.14	4.90	4.10	5.23	3.55	4.65
	(S.D.)	(1.18)	(1.00)	(1.15)	(1.58)	(1.66)	(1.47)	(1.47)	(1.92)
平等意識高群									
恋人	MEAN	4.57	5.86	4.42	4.20	3.96	5.57	4.22	4.12
	(S.D.)	(1.03)	(0.84)	(0.94)	(1.76)	(1.64)	(0.78)	(1.01)	(1.94)
友人	MEAN	4.50	5.25	3.31	4.33	3.67	4.99	2.60	3.38
	(S.D.)	(0.96)	(0.92)	(0.90)	(1.32)	(1.34)	(1.33)	(1.17)	(1.87)
合計	MEAN	4.53	5.49	3.74	4.28	3.78	5.22	3.23	3.67
	(S.D.)	(0.98)	(0.93)	(1.06)	(1.50)	(1.46)	(1.18)	(1.36)	(1.92)
合計									
恋人	MEAN	4.82	5.90	4.57	4.73	4.29	5.69	4.37	4.76
	(S.D.)	(1.14)	(0.86)	(0.96)	(1.74)	(1.77)	(0.95)	(1.18)	(1.91)
友人	MEAN	4.51	5.31	3.58	4.52	3.75	4.95	2.82	3.83
	(S.D.)	(1.05)	(0.96)	(1.05)	(1.46)	(1.41)	(1.45)	(1.23)	(1.94)
合計	MEAN	4.63	5.53	3.95	4.60	3.95	5.22	3.39	4.17
	(S.D.)	(1.09)	(0.97)	(1.12)	(1.57)	(1.57)	(1.33)	(1.42)	(1.98)
F-value									
主効果	平等意識	1.85	0.38	5.06 *	6.85 **	2.15 †	0.11	2.79 †	10.03 **
	関係種別	2.50	12.59 **	31.08 **	0.70	3.90	10.10 **	52.09 **	8.12 **
交互作用		1.40	0.00	0.31	1.74	0.85	0.53	0.04	0.45

注) † p<.10 * p<.05 ** p<.01

(SD=1.06)、低群平均4.14 (SD=1.15))、『欲求：恋愛 (単一項目)』F 値6.85 ($p < .01$ 、高群平均4.28 (SD=1.50)、低群平均4.90 (SD=1.58))、『行動：恋愛 (単一項目)』F 値10.03 ($p < .01$ 、高群平均3.67 (SD=1.92)、低群平均4.65 (SD=1.92))であった。さらに、『行動：表面的 (世間話)』、『行動：表面的 (学校)』では、同様に『伝統的性別役割観否定』高群のほうが低群より低いという傾向がみられた。関係種別の主効果は、『欲求：表面的 (世間話)』、『欲求：恋愛 (単一項目)』、『行動：表面的 (世間話)』以外で有意となり、恋人のほうが友人より高かった。

『伝統的性別役割観否定』×関係種別にみた自己呈示の分散分析結果は以下の通りとなった。『伝統的性別役割観否定』の主効果が有意となったものは、『行動：個人的親しみやすさ』F 値5.67 ($p < .05$ 、高群平均3.82 (SD=1.52)、低群平均4.32 (SD=1.52))、『行動：外見的魅力』F 値4.05 ($p < .05$ 、高群平均4.19 (SD=1.69)、低群平均4.63 (SD=1.56))であった。関係種別の主効果は、『欲求：社会的望ましさ』のみは傾向差であったが、その他はすべて有意となった。開示・呈示とも、交互作用はみられなかった。

『伝統的性別特性観否定』×関係種別にみた自己呈示の分散分析結果で、平等意識の主効果が有意となったものは、『欲求：内面的』F 値4.30 ($p < .05$ 、高群平均3.78 (SD=1.15)、低群平均4.10 (SD=1.07))のみであった。ただし、『欲求：恋愛 (単一項目)』は、『欲求：内面的』と同様に『伝統的性別特性観否定』高群のほうが低群より低いという傾向がみられた。関係種別の主効果は、『欲求：表面的 (学校)』、『欲求：内面的』、『行動：表面的 (学校)』、『行動：内面的』、『行動：恋愛 (単一項目)』は1%水準、『行動：表面的 (世間話)』は10%水準でみられ、いずれも恋人のほうが高かった。

『職業面での平等支持』×関係種別にみた自己開示の分散分析結果で、平等意識の主効果が有意となったものはなく、『行動：表面的 (学校)』がF 値2.88にて傾向を示したのみであった。平均値をみると、上述の効果と異なり、『職業面での平等支持』高群のほうが5.45 (SD=1.19)にて、低群5.00 (SD=1.43)より高くなっていた。関係種別の主効果は、『伝統的性別特性観否定』の結果と同様に、『欲求：表面的 (学校)』、『

『欲求：内面的』、『行動：表面的 (学校)』、『行動：内面的』、『行動：恋愛 (単一項目)』は1%水準、『行動：表面的 (世間話)』は10%水準でみられ、いずれも恋人のほうが高かった。

『伝統的性別特性観否定』または『職業面での平等支持』×関係種別にみた自己呈示の分散分析結果では、平等意識の主効果が有意となったものはなく、関係種別の主効果がほぼ全て有意となり、平均値はいずれも恋人のほうが高かった。

関係重要性は、平均4.49 (SD=1.42)であった。この平均値を使用して、関係重要度高群・低群の2群に分けた。さらに、自己開示・自己呈示について男女平等意識×関係種別×関係重要性の分散分析を行った。男女平等意識と関係重要性の2次の交互作用が有意となったものは、『伝統的性別役割観否定』における『自己呈示：欲求：有能さ』(F 値4.15、 $p < .05$)、『伝統的性別特性観否定』における『自己呈示：欲求：外見的魅力』(F 値5.51、 $p < .05$)、『職業面での平等支持』における『自己呈示：欲求：有能さ』(F 値4.68、 $p < .05$)および『社会的望ましさ』(F 値7.06、 $p < .01$)である。いずれも、男女平等意識低群より、高群のほうが関係重要性の高低によって得点差を大きなものとしていた。上記結果より、最もF値の大きかった『職業面での平等支持』における『社会的望ましさ』の結果を Fig. 1 に、他とは若干傾向の異なった『伝統的性別特性観否定』における『外見的魅力』の結果を Fig. 2 に示す。

IV. 考 察

本研究は、女性大学生を対象に、男女平等意識が異性との関係における自己開示・自己呈示に与える影響を仮説検証することを目的としたものである。

男女平等意識尺度は、先行研究の2因子とは異なり『伝統的性別役割観否定』、『伝統的性別特性観否定』、『職業面での平等支持』の3因子構造となった。このような因子構造の差異が生じた理由は、この尺度が現在開発中のものであり、妥当性・信頼性に問題があるとも考えられるが、被験者属性の差異に由来するとも考えられる。先行研究での被験者は、ジェンダーに関する講義の受講者であり、調査時期も学期の終わりに

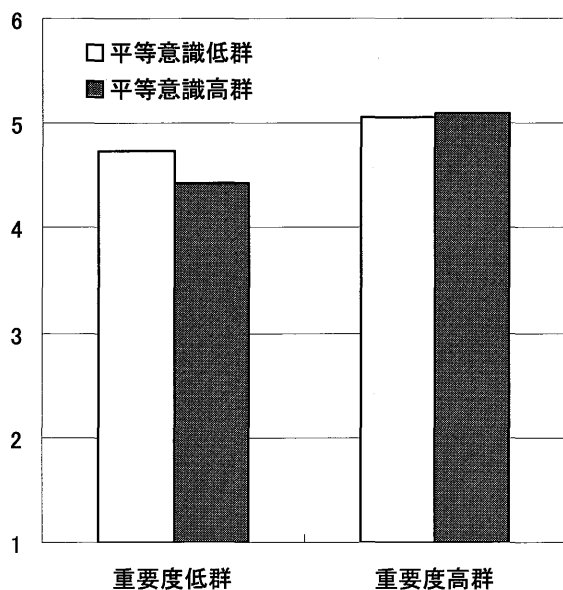


Fig. 1 『職業面での平等支持』×関係重要度別
『呈示：欲求：社会的望ましさ』

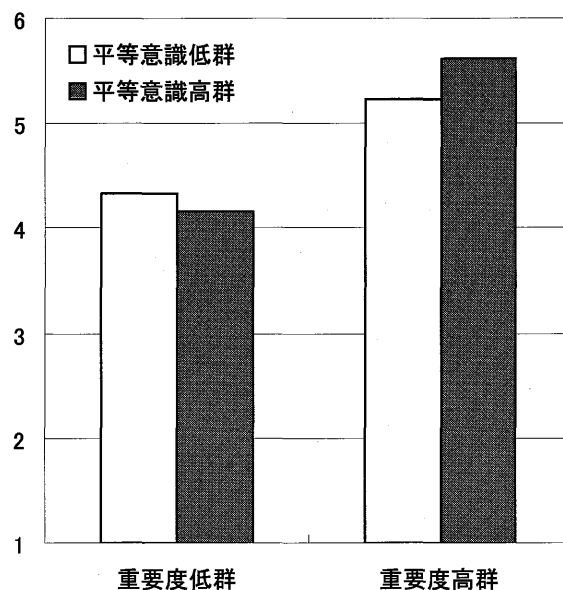


Fig. 2 『伝統的特性観否定』×関係重要度別
『呈示：欲求：外見的魅力』

位置しており、教育効果により、「平均的」な反応とはなっていなかったのかもしれない。

ところで、平均値をみると『伝統的性別特性観否定』および『職業面での平等支持』は高いが、『伝統的性別役割観否定』は低く、「どちらともいえない」に近い得点となっていた。男女平等意識尺度中、この『伝統的性別役割観否定』が、被験者の本音、つまり無意識的に影響を受けている男女差別観表す測度となっているのかもしれない。『伝統的性別役割観否定』と『職業面での平等支持』の相関が低いものであったことも、男女平等に関して、「整理されていない」考えや思いを抱いている被験者像を浮き彫りにしたとも考えられる。この点に関しては、今後さらなる研究を行い、明らかとする必要があるだろう。

想定人物に関する結果をみると、恋人に対しては、恋愛感情が高く友情は低い、重要性は高く、交際期間は短いことが判った。友人に対しては、その逆の結果となった。よって、本データの関係種別は、非常に信頼できるものとなっている。

自己開示の欲求、行動とも『表面的（世間話）』が最も高く、次いで『表面的（学校）』、『恋愛（単一項目）』が同レベルで中間の値を、『内面的』は最も低いという値となった。『表面的（学校）』が『表面的（世間話）』に比較し低かった理由は、想定人物が大学生でない場合も含まれていたからではないかと思われる。

ただし、想定人物の年齢や社会的地位を尋ねていないため、推測の域をでていない。今後の研究では想定人物の簡単な属性を尋ねることが有用であろう。『恋愛（単一項目）』は、研究計画時点では、内面的レベルであると想定していたが、値から見る限り、中間レベルであることが判った。また、自己開示の欲求と行動得点は、非常に高い正相関を示しており、欲求と行動に一貫性があることが明らかとなった。

自己呈示：欲求の得点をみると、被験者は親しみやすい人物であると認知されたいと思っていることが判る。しかし、実際の自己呈示行動となると、外見的魅力のアピールが最も高い。同一項目の欲求と行動得点は、正相関を示してはいるが、開示に比べて低い値となっている。このような結果となった理由として、項目に問題があったのか、自己呈示については、欲求と行動の一貫性が低いものであるのかを、今後検討する必要があるだろう。

想定人物との関係に関する項目および尺度と、自己開示・自己呈示間の相関をみると、関係重要性、想定人物への恋愛感情、想定人物からの恋愛感情、想定人物からの恋愛感情希望、想定人物からの親しさ希望、LOVE 得点がほとんどの自己開示・自己呈示因子と正の相関を示した。これらの結果は先行研究を支持するものである。

仮説から考えると、男女平等意識と自己開示および

自己呈示は負の相関を示すことが予想される。『伝統的性別役割観否定』が示した多くの有意な相関は、開示・呈示とも、仮説を支持する負であった。『職業面での平等支持』は、有意な相関を示したものは1組であったが、『行動：表面的（世間話）』と仮説とは逆の正であった。

自己開示と男女平等意識×関係種別の分散分析結果をみると、『伝統的性別役割観否定』の主効果は有意となるものが多く、平等意識高群のほうが低群より低いという仮説を支持する結果を示した。しかし、『伝統的性別特性観否定』と『職業面での平等支持』については、有意となったものは少なかった。ただし、有意となったものの平均値は、すべて平等意識高群のほうが低群より低いという仮説を支持するものであった。自己開示において、関係種別の主効果は大半が有意となり、友人より恋人に開示を望み、かつ開示を行っていることが明らかとなった。

自己呈示と男女平等意識×関係種別の分散分析結果をみると、男女平等意識の主効果が有意となったものは少なく、『伝統的性別役割観否定』における『行動：個人的親しみやすさ』、『行動：外見の魅力』のみであったが、平等低群のほうが高群より高いという仮説を支持するものであった。自己呈示において、関係種別の主効果は、自己開示と同様に、大半が有意となり、友人より恋人に呈示を望み、かつ呈示を行っていることが明らかとなった。

自己開示・自己呈示の双方において、男女平等意識と関係種別の交互作用は一切有意とならず、同じ異性との人間関係であっても、友人関係より恋愛関係のほうが男女平等意識による影響が大きいという仮説は棄却された。

男女平等意識と関係重要性の2次の交互作用が有意となったものは、自己呈示において、わずかであるがみられた。平均値をみると、いずれも、男女平等意識低群より、高群のほうが関係重要性の高低によって得点差を大きなものとしていた。

以上の結果から、男女平等意識を『伝統的性別役割観否定』に限定するなら、男女平等意識が高い女性は、親密な男性に対して、自己開示量は低いものとするという仮説は支持されたといえる。一方、自己呈示に関しては、男女平等意識が低い女性は、親密な男性に対

して、自己呈示量は高いものとするという仮説を支持する結果が若干ある程度に留まった。ところで、男女平等意識と関係重要性の交互作用は、自己開示にはなく、自己呈示のみにあった。自己呈示においては、関係種別といった2値データではなく、関係の進行レベルや関係の将来性など、より詳細な関係特性が影響を与えているのかもしれない。また、本研究で使用された自己呈示の合成変数は、同性同士も含む一般の人間関係で重要視される好特性であり、このような特性では、男女平等意識の影響を検出できなかったのかもしれない。今後は、男女平等意識が影響を与えるであろう「異性」を意識した呈示、例えば「女らしさ」などを調べたい。さらには、今回の研究では、肯定的イメージを与える呈示に限ったが、泣くなどの否定的イメージを与える呈示についても取り上げることが必要だと考える。

男女平等意識が与える自己開示・自己呈示への影響は、異性の友人関係より、恋愛関係において顕著となるという仮説は棄却された。先行研究の多くが、恋愛感情と異性との友情は、非常に似通っていることを指摘している。よって、最も親しい異性を思い浮かべるという教示によって想定された人物は、例え恋愛対象ではなくとも、異性であることを意識させる存在であるのかもしれない。この点については、今後、同性の友人と異性の友人を比較し、男女平等意識による影響差があるのかを調べることにより明らかにしていきたい。

男女平等が自己開示や自己呈示に与える影響を知ることは、対人行動を明らかにするのみに留まらず、行動を規定する無意識レベルの男女平等意識にも迫ることを可能とする。今後は、被験者に男性も加えること、想定人物を同性とすることなど、多次元の比較検討が可能となるよう研究デザインを発展させていきたい。

V. 付 記

本研究のデータの一部分は、人間関係学部人間関係学科小川宏美が2007年度人間関係学部卒業研究のために収集したものをを使用した。小川宏美の協力を深く感謝する。

VI. 引用文献・参考文献

- Altman, I. 1973 Reciprocity and interpersonal exchange. *Journal of Social Behavior* Vol.3 249-261
安藤清志 1990 自己の姿の表出の段階 中村陽吉(編)

- 自己過程の社会心理学 143-198 東大出版界
- 安藤清志 1994 セレクション心理学1 見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学—サイエンス社
- 大坊郁夫 1988 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第29回大会発表論文集 64-65.
- Davis, K.E. 1985 Near and Dear: Friendship and love compared. *Psychology Today* Vol.19 22-30
- 出口拓彦・吉田俊和 2004 自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響—被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究—対人社会心理学研究 Vol.4 51-56
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究 Vol.58 No.2 91-97
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 1983 日本版 Love-Liking 尺度の検討 広島大学総合科学部紀要Ⅲ Vol.7 39-46
- 深澤道子・篠崎信之・越川房子 1991 嫉妬・羨望に関する基礎的研究(I) 大学生の恋愛嫉妬について 日本心理学会第56回大会発表論文集 650
- 飯長喜一郎 1977 グループ合宿における自己開放性 東京大学教育学部紀要 17 77-84
- Jones, E.E. & Pittman, T.S. 1982 Toward a general theory of strategic self-presentation. In J.Suls (Ed.) *Psychological perspective on the self* Vol.1 Erlbaum 231-262
- Jourard, S.M. & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure *Journal of Abnormal and Social Psychology* Vol.56 91-98
- 栗林克匡 1995 自己呈示:用語の区別と分類 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科 42 107-114
- Leary, M.R., Nezek, J.B., Doens, D.L., Radford Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. 1994 Selfpresentation in everyday interactions. *Journal of Personality and Social Psychology* Vol.67 664-673
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論 33 355-370.
- 松井 豊 1993 セレクション心理学12 恋心の科学 サイエンス社
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology* Vol.16 265-273
- 佐野幸子 2005 セクシュアルハラスメントに対する意識—行為への不快感・被害者への認知等の視点から—福岡女学院大学大学院紀要(臨床心理学) Vol.3 31-38
- 佐野幸子・宗方比佐子 1999 職場のセクシュアル・ハラスメントに関する調査—女性就業者データから—経営行動科学 Vol.13 No.2 99-111
- Schlenker, B.R. 1975 Self-presentation: Managing the impression of consistency when reality interferes with self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology* Vol.32 1030-1037
- 多川則子・吉田俊和 2006 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究 Vol.22 126-138
- 竹村和久 1987 異性選択過程の研究(Ⅱ)—相互作用期間の予期が選択過程におよぼす効果—日本社会心理学会第28回大会発表論文集 38
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究 Vol.31 2 132-146
- 谷口淳一・大坊郁夫 2005 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究 Vol.45 13-24